

## 1. 令和8/9年度理事長候補者及び関東支部長候補者選出の件

令和7年11月14日に令和8/9年度役員候補者会が開催され、以下の通り選出されましたので、ご報告申し上げます。令和8年4月16日の定時社員総会(札幌)にてご承認をお願いする予定です。

令和8/9年度 理事長候補者

小田 義直

(九州大学大学院医学研究院形態機能病理学)

令和8/9年度 関東支部長候補者

長尾 俊孝

(東京医科大学人体病理学分野)

## 2. 第71回秋期特別総会 終了

標記総会が開催され、盛会にて終了いたしました。

会期: 2025年11月13日(木)、14日(金)

会場: 名古屋コンベンションホール

(オンデマンド配信期間: 2025年11月25日(火)

正午~12月22日(月)正午)

会長: 愛知医科大学 都築豊徳

## 3. 第72回秋期特別総会 [IAP国際学会と合同開催] (福岡) HP公開

第72回秋期特別総会のホームページを公開いたしました。IAP国際学会と合同開催のため、会期は2026年10月8日(木)・9日(金)と例年より約1ヵ月前倒しとなります。

参照HP:

<https://www.congre.co.jp/jsp72/index.html>

## 4. 第72回(令和8年/2026年)日本病理学会秋期特別総会学術研究賞、症例研究賞について(公募のお知らせ)

令和8年/2026年秋開催予定の第72回日本病理学会秋期特別総会(福岡)における学術研究賞と症例研究賞の募集をいたします。

これら賞の応募内容は、以下の要件を満たすことといたします。

学術研究賞とは:

病理学領域における特定の課題について、優れておりかつ蓄積した業績を挙げていると判断された会員(学術評議員)が、秋期特別総会における講演により、会員の病理に関する学術、医療の振興とその普及に資することを企図して学術研究賞を設ける。

学術研究賞の内容は、以下の要件を満たすものとする。

- (1) 優れており、かつ蓄積された研究であること。
- (2) 原則として日本国内で行われた研究であること。
- (3) 内容に関する責任の明確な研究者による発表で、内容は共同研究によるものであっても発表者自身はそれを代表するものであること、従って単独名が望ましい。

尚、Pathology Internationalへ総説を投稿すること。

受賞者は、ヨーロッパ病理学会の派遣候補として推薦する場合があります。

症例研究賞とは:

病理学領域における特定の疾患について、症例の蓄積による解析及び病理診断・病態解明に寄与する優れた症例研究業績を挙げていると判断された会員(学術評議員および学術評議員経験者)が、秋期特別総会における講演により、会員の病理に関する学術、医療の振興とその普及に資することを企図して症例研究賞を設ける。

症例研究賞の内容は、以下の要件を満たすものとする。

- (1) 症例の蓄積による解析及び病理診断・病態解明に寄与する優れた研究であること。
- (2) 内容に関する責任の明確な研究者による発表で、内容は共同研究によるものであっても発表者自身はそれを代表するものであること、従って単独名が望ましい。

尚、Pathology Internationalへ総説を投稿することが望ましい。

学術研究賞、症例研究賞受賞者として講演することを希望する会員は、下記の要領でご応募ください。

記

学術研究賞

(1) 応募資格: 日本病理学会学術評議員

(2) 提出書類: HPよりダウンロード

※書式は毎年変更があるのでご留意下さい。

※応募書類は以下を PDF 化した電子媒体（すべての書類をひとつの PDF ファイルとしてつなげたもの）にて提出して下さい。

① 日本病理学会ホームページよりダウンロードした所定の書式に、応募者名、演題名、選考用抄録（900 字以内）などを記載したもの。

② 講演内容に直接関係のある自著論文 20 編以内の一覧。

※③ の別刷をつけた業績の先頭に「○」印をつけて下さい。

③ 上記自著論文一覧の中から代表的な自著論文の別刷（5 編以内）。

上記①～③の書類を、順番にひとつの PDF ファイルとしてつないでお送り下さい。

※ひとつのフォルダ内に複数の PDF 化されたファイルを入れて提出されたものは受け取りできません。

提出先：日本病理学会事務局

(3) 提出方法：

① 応募書類送付の前に、応募申請の e-mail をお送り下さい。

e-mail : jsp.office@pathology.or.jp

申請メールと応募書類の 2 つがそろって応募完了となりますのでご留意下さい。

i) e-mail の件名：「学術研究賞応募申請」会員番号

ii) 1. 送信予定日時 2. 氏名 3. 所属（教室名は正式名称で記載）4. 演題名 を記載して下さい。

② ① の申請メール送信後、応募書類（すべての必要書類をひとつの PDF ファイルとしてつないだもの）を PDF 電子媒体として下記の URL よりアップロードして下さい。

応募書類の提出先：

<https://biz.datadeliver.net/posts/gakujiyutsu2026a>

i) アップロードの際にコメント欄にお名前と会員番号を記入して下さい。

ii) ファイル受領から「業務日」3 日以内に受領メールを返信いたします。受領メールが届かない場合は、すみやかに事務局にお問い合わせ下さい。

iii) 各種連絡や審査用資料の作成は、会員システムに登録された情報を元に行われます。事前に登録内容の確認、修正をお願いします。

(4) 募集締切：

令和 7 年 12 月 21 日（日）必着

症例研究賞

(1) 応募資格：日本病理学会学術評議員および学術評議員経験者

(2) 提出書類：HP よりダウンロード

※書式は毎年変更があるのでご留意下さい。

※応募書類は以下を PDF 化した電子媒体（すべての書

類をひとつの PDF ファイルとしてつなげたもの）にて提出して下さい。

① 日本病理学会ホームページよりダウンロードした所定の書式に、応募者名、演題名、選考用抄録（900 字以内）などを記載したもの。

② 講演内容に関係のある自著論文 10 編以内の一覧。

※③ の別刷をつけた業績の先頭に「○」印をつけて下さい。

③ 上記自著論文一覧の中から代表的な自著論文の別刷（3 編以内）。

上記①～③の書類を、順番にひとつの PDF ファイルとしてつないでお送り下さい。

※ひとつのフォルダ内に複数の PDF 化されたファイルを入れて提出されたものは受け取りできません。

提出先：日本病理学会事務局

(3) 提出方法：

① 応募書類送付の前に、応募申請の e-mail をお送り下さい。

e-mail : jsp.office@pathology.or.jp

申請メールと応募書類の 2 つがそろって応募完了となりますのでご留意下さい。

i) e-mail の件名：「症例研究賞応募申請」会員番号

ii) 1. 送信予定日時 2. 氏名 3. 所属（教室名は正式名称で記載）4. 演題名 を記載して下さい。

② ① の申請メール送信後、応募書類（すべての必要書類をひとつの PDF ファイルとしてつないだもの）を PDF 電子媒体として下記の URL よりアップロードして下さい。

応募書類の提出先：

<https://biz.datadeliver.net/posts/gakujiyutsu2026b>

i) アップロードの際にコメント欄にお名前と会員番号を記入して下さい。

ii) ファイル受領から「業務日」3 日以内に受領メールを返信いたします。受領メールが届かない場合は、すみやかに事務局にお問い合わせ下さい。

iii) 各種連絡や審査用資料の作成は、会員システムに登録された情報を元に行われます。事前に登録内容の確認、修正をお願いします。

(4) 募集締切：

令和 7 年 12 月 21 日（日）必着

第 72 回日本病理学会秋期特別総会における学術研究賞、症例研究賞受賞者は、令和 8 年 2 月の学術委員会において厳正・公明に選考し、その後の理事会での審議によって決定いたします。

本件についてご質問がありましたら、日本病理学会事務局までお問い合わせ下さい。

日本病理学会事務局：jsp.office@pathology.or.jp

参照 HP:

<https://www.pathology.or.jp/news/members/gakujyutu/2026AB.html>

## 5. 令和7年度学術奨励賞受賞候補者の応募について

日本病理学会学術委員会は、学術評議員の推薦をもって学術奨励賞受賞候補者を公募していましたが、令和4年度より候補者による応募とし、応募には学術評議員の推薦を必要といたします。

つきましては、令和7年度学術奨励賞受賞候補者を以下のとおり募集いたします。

応募内容は、以下の要件を満たすことといたします。

学術奨励賞とは:

学術奨励賞は、病理学領域における研究と診断の中で特に優れた学術的貢献を行った本学会若手会員に対して与えられる賞です。

応募資格について

- (1) 年度末(令和8年3月31日)において、継続した5年以上の会員歴をもつ40歳以下の会員、あるいは継続した5年以上の会員歴をもつ学位取得後11年未満の会員であること。
- (2) 推薦にかかわる学術評議員各位は、応募者の研究歴・業績などが学術奨励賞に相応しいことを確認した上で推薦すること。

受賞者には、第115回総会(令和8/2026年4月 於札幌)にて開催予定の「学術奨励賞受賞者講演」において英語での口演をいただく予定です。

その際の優秀者は令和9/2027年度英国病理学会派遣候補者(本学会より派遣補助金15万円支給)に推薦されます。

応募要領

### 1) 募集人数:

本年度は、数名への授与を予定しています。

### 2) 提出書類:

HPよりダウンロード

※下記(1)と(3)が一式になっています。

※書式は毎年変更があるのでご留意下さい。

※応募書類は以下をPDF化した電子媒体(すべての書類をひとつのPDFファイルとしてつなげたもの)にて提出して下さい。

#### (1) 「日本病理学会学術奨励賞申請書」

申請者が上記よりダウンロードした書式に必要事項を記入、押印したものをPDF化して下さい。

\* (2) の別刷をつけた業績の先頭に「○」印をつけて下さい。

#### (2) 本課題に関連する論文の別刷り(3編以内)

#### (3) 「日本病理学会学術奨励賞受賞候補者推薦書」

推薦者が上記よりダウンロードした書式に必要事項を記入、押印したものをPDF化して下さい。

上記(1)～(3)の書類を、順番にひとつのPDFファイルとしてつなげてお送り下さい。

\*ひとつのフォルダ内に複数のPDF化されたファイル

を入れて提出されたものは受け取りできません。

提出先: 日本病理学会事務局

### 3) 提出方法:

申請は受賞候補者となる本人から書類をお送り下さい。

- (1) 応募書類送付の前に、応募申請のe-mailをお送り下さい。

e-mail: [jsp.office@pathology.or.jp](mailto:jsp.office@pathology.or.jp)

申請メールと応募書類の2つがそろって応募完了となりますのでご留意下さい。

- ① e-mailの件名:「学術奨励賞応募申請」会員番号
- ② 1. 送信予定日時 2. 氏名 3. 所属(教室名は正式名称で記載) 4. 申請課題名もしくは功績名を記載して下さい。
- (2) 上記(1)の申請メール送信後、応募書類(すべての必要書類をひとつのPDFファイルとしてつなげたもの)をPDF電子媒体として下記のURLよりアップロードして下さい。

応募書類の提出先:

<https://biz.datadeliver.net/posts/Incitementaward2025>

- ① アップロードの際にコメント欄にお名前と会員番号を記入して下さい。
- ② ファイル受領から「業務日」3日以内に受領メールを返信いたします。受領メールが届かない場合は、すみやかに事務局にお問い合わせ下さい。
- ③ 各種連絡や審査用資料の作成は、会員システムに登録された情報を元に行われます。事前に登録内容の確認、修正をお願いします。
- 4) 募集締切: 令和7年12月21日(日) 必着
- 5) 学術奨励賞受賞者(受賞者)には、賞状と記念品が贈呈されます。
- 6) 賞の授与は、次年度の総会において理事長が行います。
- 7) 尚、本件について、ご質問などがありましたら、本学会事務局までお問い合わせください。

日本病理学会事務局: [jsp.office@pathology.or.jp](mailto:jsp.office@pathology.or.jp)

参照 HP:

<https://www.pathology.or.jp/news/members/gakujyutu/R07Incitement-award.html>

## 6. 第20回診断病理サマーフェスト

—病理と臨床の対話—

2026年度の診断病理サマーフェストは下記の要領でハイブリッド開催(現地・オンデマンド配信)いたします。

現地会場参加は、先着順とさせていただきます。

Web開催は講演の模様を収録し、オンデマンド配信いたします。

テーマ: 骨髄(造血器疾患)

会期:

現地開催 2026年9月12日(土)・9月13日(日)

※オンデマンド配信の視聴も可

Web 開催 2026 年 9 月 18 日（金）～10 月 16 日（金）  
正午  
※オンデマンド配信

会 場：福島県立医科大学駅前キャンパス  
（保健科学部多目的ホール）

〒960-8516 福島県福島市栄町 10 番 6 号

電 話：024-581-5503

対 象：骨髄（造血器疾患）に興味のある病理医，  
臨床医，放射線科医，臨床検査技師，  
放射線技師

形 式：講義，質疑応答 / Web 視聴

内 容：

9 月 12 日（土）

造血器疾患イントロダクション

塗抹標本の作製方法，見方

フローサイトメトリー，染色体分析の見方

骨髄クロット，骨髄生検標本の見方

骨髄での特殊染色・免疫染色の使い方

白血病（AML, ALL）・治療及び移植後の骨髄の評価（血液内科医 / 病理医より）

MPN（MDS/MPN を含む）

（血液内科医 / 病理医より）

9 月 13 日（日）

クローン性造血 MDS

（血液内科医 / 病理医より）

骨髄腫とその鑑別疾患（MGUS, LPL, 寒冷凝集素症を含む）（血液内科医 / 病理医より）

骨髄に関連するリンパ性腫瘍（CLL, リンパ腫の骨髄浸潤）（血液内科医 / 病理医より）

小児の造血器疾患（JMML, MDS, 再生不良性貧血など）  
全身疾患の骨髄病理（血球貪食症候群，代謝性疾患など）

定 員：現地開催 先着 110 名

Web 開催（オンデマンド配信）制限なし

※冊子印刷の関係で，8 月 14 日（金）までの登録をお勧めいたします。

それ以降はハンドアウトの予定数に達し次第，受付終了とさせていただきます。

単 位：病理領域講習（専門医更新）4 単位

病理専門医受験資格「病理診断に関する講習会」に該当

※現地・Web とともにすべての参加・視聴が必要

参加費：20,000 円

（初期・後期研修医，大学院生，臨床検査技師 15,000 円）

※会員・非会員ともに課税（税込 10%）

一般社団法人日本病理学会インボイス番号：T1010005004655

参加受付期間：2026 年 6 月 3 日（水）正午～9 月 28 日（月）正午

受講証明書：9 月 18 日（金）～10 月 16 日（金）

正午のオンデマンド配信期間中，現地参加者，Web 参加者ともにマイページより各自でダウンロードをお願いします。受講証明書発行に際して，現地参加者は Web 視聴の必要はございません。

ハンドアウト

現地参加者：現地会場で受付時にお渡しいたします。

Web 参加者：9 月 16 日（水）に登録住所宛に発送予定。

世 話 人：橋本優子

（福島県立医科大学病理病態診断学講座）

運営事務局：株式会社学会サービス 内

〒150-0032 東京都渋谷区鶯谷町 7-3-101

TEL：03-3496-6950

FAX：03-3496-2150

E-mail：dpsf20@gakkai.co.jp

参加登録方法等詳細は以下 HP をご確認ください。

<https://www.pathology.or.jp/news/members/summerfest-26.html>

## 7. 2025 年ヨーロッパ病理学会参加報告

2025 年 9 月 6 日から 5 日間にわたり，ウインで開催されたヨーロッパ病理学会学術集会に参加した研究者から報告書が届きました。

高原大志

（愛知医科大学病院病理診断科）

中山敦仁

（東京大学医学部人体病理学・病理診断学教室）

P5 から P8 をご参照ください。

## 8. 2025 年度ハンガリー病理解剖トレーニングコース体験記②

P9 から P15 をご参照ください。

## 9. 会員の訃報

以下の方がご逝去されました。

倉田 明彦 功労会員（令和 7 年 9 月 18 日ご逝去）



## 2025 年 欧州病理学会参加報告

愛知医科大学病院病理診断科

高原大志

この度、オーストリア、ウィーンにて開催された第 37 回欧州病理学会（2025 年 9 月 6-10 日）に派遣して頂き、日本病理学会との joint session で発表させて頂きましたので、報告をいたします。

今回の発表のお話をいただいたのは、2 月か 3 月ごろだったと記憶しております。空間トランスクリプトーム解析を題材として、30 分発表させていただけるとのこと、大変光栄なことではありましたが、正直なところ発表までにデータをまとめることができるかという点が大変不安でありました。わたくしの発表は前立腺導管内癌を対象とした空間トランスクリプトーム解析と、前立腺癌の間質を対象としたより解像度の高い解析の二本立てで行う予定でした。前者は解析が終了してすでに論文を投稿していたのですが、後者はその時点においてまだシークエンスの結果が終わっていないという状況でありました。そのような状況でありながら、何とか形をまとめて発表を終えることができ、現在では大変安堵しております。

私が発表させていただいたセッションでは、日本から中山敦仁先生（東京大学）、ドイツから Dr. Denis Schapiro（ハイデルベルク大学）が発表されていまして。中山先生は我々とは異なるプラットフォームを用いて胃癌を対象に解析されており、比較的私のような、外科病理医にもなじみのあるテーマで、大変興味深く拝聴いたしました。発表後に伺ったところ、我々がデータ解析の多くを受託解析に依頼しているのに対し、中山先生はデータ解析もご自身のラボで完結されてらっしゃるとのこと、深い感銘を受けました。Dr. Denis Schapiro の発表は解析のパイプラインそのものに関する発表でありまして、正直なところ私には難解でしたが、空間オミックスデータをいかに統合し、臨床に還元していくかという先進的な取り組みであり、扱われているであろうデータの膨大さと複雑さに圧倒されました。

また、発表会場には Prof. Geert J.L.H. van Leenders（エラスムス大学医療センター）もお越しになっており、驚いたことに私の導管内癌の論文を査読されていたとのことでした。発表後の質問で導管内癌と High-grade PIN の関係について質問されたと記憶していますが、的確に答えられたか自信がありません。また発表後は、小田義直先生、都築豊徳先生、山元英崇先生、岩崎健先生、中山敦仁先生とご一緒にウィーン名物のウィンナーシュニッツェルなどをいただき、大変楽しい時間を過ごさせていただきました。

その他の演題に関しては、人工知能に関連する発表が非常に多く、時代の潮流を感じさせられるところがありました。

最後に、このような貴重な機会を与えていただきました日本病理学会ならびにヨーロッパ病理学会の関係の方々、また派遣に際して多大なご支援をいただきました菊川敦子様から御礼申し上げたいと思います。

左から、高原の発表の様子、ウィンナーシュニッツェル、ザッハトルテ



## 第 37 回欧州病理学会 (the 37<sup>th</sup> European Society of Pathology) に参加して

東京大学医学部人体病理学・病理診断学教室 中山敦仁

2025 年 9 月 6 日から 9 日まで、ウィーンで開催された第 37 回欧州病理学会 (以下 ESP) に派遣され、口頭発表させていただく機会に恵まれました。学会の様子や自分が参加したセッションについて報告しますので、今後、海外学会へ参加される際に役立つ内容となれば幸いです。

### 1. 学会参加まで

ESP では、日本病理学会との joint session が隔年で開催されているとのことです。本年のテーマは空間的発現量解析で、日本側と欧州側が中堅クラスの研究者をそれぞれ 2 名ずつ選出するとのことで、発表の機会をご提案いただきました。私のような業績の少ない研究者でご迷惑にならないかと不安になりましたが、この二度とないチャンスに挑戦することを決意しました。発表内容については、当教室の胃癌チームの牛久哲男教授、鯉沼代造特任教授、牛久綾准教授と相談して、進行中のプロジェクトである胃癌の空間的発現解析を選んで、準備を進めました。

### 2. 学会の様子

参加者の出身地は、ドイツ、オーストリア、イタリア、イベリア諸国、その他の東欧、北欧、北アフリカに至り、現地では多様な言語が飛び交っていました。男女はほぼ同数で、若い年齢層が主体でした。学会側の発表では、オンライン込みで 5000 人以上が参加した大規模な会だったようです。

内容は概ね日本病理学会と同じく、系統的診断講習会、一般口演、ポスター発表、共同セッションに分かれていました。診断講習会は、テーマが明確に決められていて、それぞれの専門家が豊富な組織像を提示してくれるので、日々の診断に有用な内容ばかりでした。特に、Slide seminar が各臓器について 2 時間ずつ設けられており、難解症例の鑑別の進め方を聞けるのは、大変勉強になりました。一般口演およびポスターは、意外にも件数が少なかったです (事前のセレクションが厳しいのかもしれませんが)。共同セッションは、日本病理学会以外に、IARC, IAP, 韓国病理学会との連携枠が組まれていました。

少し意外だったのは、AI 研究が盛んな一方で、分子病理学的な研究発表が全体的に少ないという点でした。ESP は病理医主体の学会で、診断病理学を主眼としているためかもしれません。

### 3. ESP-JSP joint session

私が参加した共同セッションは、3 日目の夕方でした。都築豊徳先生と Prof. Xavier Matias-Guiu が共同座長を務めてくださり、高原大志先生、Dr. Denis Schapiro (ハイデルベルク大学空間解析センター長)、中山の順で発表しました。欧州側の研究者の一人が欠席で、不覚にもトリを務めることになってしまいました。オーディエンスは 30 人程度でしたが、病理医だけでなく、computer science の背景の研究

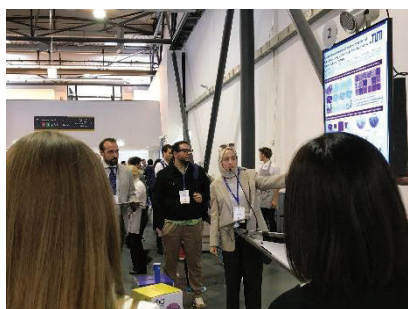
者も多かったようです。高原先生は、前立腺癌の病理形態学と遺伝子異常を紐づける結果について、クリアにお示しになられました。Dr. Schapiro は、これまでに実装されてきた解析手技の方法論から、空間的発現量解析を個別化医療として運用する場合の臨床的問題まで、包括的に講演されました。

先のお二人が大変充実した内容をお話しされ、更に緊張感が高まる中、最後に私が発表を行いました。前半では、胃底腺型胃癌の内視鏡的切除検体に対して、空間的発現解析を行った結果、鑑別診断に有用な分子を同定したという内容を提示しました。日本のお家芸である早期胃癌検体の組織像を豊富に交えて、その診断学的重要性は十分に伝わったと思うのですが、欧米では早期胃癌への馴染みが未だに薄いのか、残念ながら、期待したほどのリアクションは得られませんでした。後半では、胎児型胃癌の空間的発現解析について提示しました。まだ解析途中の内容でしたが、胎児型胃癌特有の組織型の多彩性を、発生学的に重要な分子群の発現量変化に関連付ける試みについて、概略を説明しました。発表後、会場から多数の質問をいただく事ができましたが、組織学的変化を裏付ける分子群の探索方法や、pan-cancer アプローチへの発展方法など、高度な質問内容ばかりで、現状の自分のスキルでは十分な回答ができず、非常に悔しい思いをしました。

#### 4. 最後に

今回の派遣においては、欧州での病理学研究の動向を知ただけではなく、他国の研究者とのディスカッションを通じて、大きな刺激を受け、今後も研究に注力していかなばならないという決意を新たにしました。また、各国の研究者が直面している問題は、意外にも共通していることも実感できました。Dr. Schapiro が講演後に、「(十分な予算があるので) 診断のサインアウトと同時に、各症例の空間的解析を追加しているが、蓄積したデータを臨床的アウトカムと結び付ける方法は模索中だ。」と言っていました。その橋渡しの役割を担えるような病理医になるべく、診断と研究を両立していきたいと思いました。

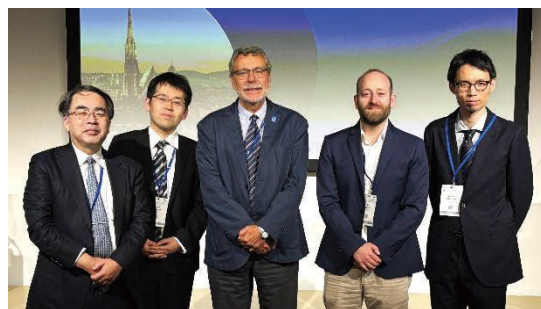
今回の派遣にあたり、セッションの策定から我々の参加費用の工面に至るまで、調整にご尽力くださいました都築豊徳先生に、心より感謝申し上げます。また、現地では、小田義直先生、山元英崇先生、岩崎健先生、高原大志先生に大変お世話になりました。日本病理学会の菊川敦子様には、派遣に際して色々な手配を頂きました。ミュンヘン工科大学の笠島-Klöppel 研究室に留学中でいらっしゃった浦礼子先生には、会場で大変お世話になり、研究室の多くの方と交流させていただきました。ご支援いただきました皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。



優秀ポスター発表



中山の発表の様子



座長と演者一同で記念撮影



## 第7回（2025年）ハンガリー病理解剖トレーニングコースに参加して 野内直子

### はじめに

鳥取大学医学部附属病院病理部の野内直子と申します。私は2025年8月に開催されました第7回ハンガリー病理解剖トレーニングコースに参加いたしました。トレーニングコースのこと、期間中の過ごし方など、私が感じたことについて以下に記載いたします。長文になりましたので、目次を作り、必要なところを参照いただければと思います。これから参加を考えておられる先生方の参考になれば幸いです。

### 目次

- スケジュール
- 解剖時
- 待機場所など
- 担当して下さった先生方、テクニシャンについて
- 注意事項
- 持ち物
- ホテル（AKEAH Verdi Budapest）
- ホテル周辺
- 観光、交通事情、その他
- 個人的に持っていく方が良さそうなもの
- 最後に

### ■スケジュール

月曜日～金曜日に合計9体の病理解剖を行い、英語で解剖報告書\*を記載、当日中に指導教官にメールで送付します。例年と異なり、月曜日の午前中に1時間のレクチャーの後に解剖を1体\*、午後に1体\*の剖検を行いました。金曜日は午前に1体剖検を行い、午後はレクチャーと UNICUM の工場見学ツアーがありました。

日曜日の夜にはレセプションディナー（図1）、木曜日夜には先生方とのディナー（図2）がありました。

今回はコース開始2日ほど前に、ゼンメルワイス大学から主要臓器の切り出し方についてのレクチャー動画の配信がありました。事前に見て、少しいメージしながら当日を迎えられて良かったです。

\*解剖報告書：事前にフォーマットが渡されますが、ハンガリー語の Word ファイルのようでスペルチェックが十分に使いません。私は自分で別の Word に記載してスペルチェックしたものをコピーしていました。

\*月曜日は非常にタフで、指導教官（Várkonyi 先生）もご存知の様子でした。午前の症例の剖出は Izsó（イジョ）さんが、臓器の切り出しは Várkonyi 先生が見せながら行ってくださいました。臓器の所見いつ

いては質問に答えながら進めるスタイルでした。

\*月曜日の午後は剖出も切り出しも参加者がメインで行っています。午前午後ともに解剖室で先生とディスカッションを行いました。



(図1) レセプションディナー。右前が Kiss 教授。ホテル 1 階のレストランにてハンガリー料理をいただきました。



(図2) 木曜日のディナー。イタリア料理のビュッフェ形式のレストランにて、みんなで地下鉄に乗って向かいました。

#### ■解剖時

剖出はテクニシャンの Izsó さんと参加者 (1 人あるいは 2 人)で行い、残りの人で臓器の切り出しと検

索を行います。1人は所見記載と写真撮影をしました。今回は東京女子医大の吉田先生が途中まで参加していただきました。私たち参加者は3人でしたが、吉田先生には写真撮影や記録をしていただいたほか、以前の参加時を踏まえたアドバイスをたくさんいただきました。吉田先生の帰国後は、1人が剖出、1人が切り出し、1人が所見の記録と写真撮影という感じで分担していました。

解剖時の服装は、上下スクラブ+長袖の長白衣を着て、袖を腕まくり+袖なしのプラスチックエプロン、というスタイルが現地方式のようです。アイシールドは先生方と Izsó さんは個人のものを使用していましたが、マスクは着けておられませんでした。足元はシューズカバーのみでした。私は感染対策が気になったので、サージカルキャップ+N95 マスク+アイシールド、スクラブ+長袖防水プラスチックエプロン+手袋2重、内履き用靴+シューズカバーのスタイルでした（図3）。

剖出時は、基本的には解剖用のナイフ（Izsó さんの私物と思われます）を使用します。剖出時のテクニックについては、週のはじめの方はその都度見せていただきながら進めるスタイルでした。慣れてくると横で見守ってくださっています。剖出が難しい箇所については Izsó さんが変わってくださいます。

剖検時は先生方は先生方で写真を撮影されます。ただ、写真のデータはいただけるときといただけないときがあるので、自分たちで撮影していたほうが良いと思われました。

組織学的に検討が必要な臓器については凍結標本を作ります。概ね執刀開始後2～2.5時間ほどで組織の回収にいられていました。脳については凍結標本の作製が難しく、得られる情報が少ないため基本的に凍結標本は作らないと Székács 先生が話されていました。標本作製数は症例や先生ごとにばらつきが大きかったです。作製後はバーチャルスライドとなって、待機場所のパソコンで見ます。私達は初日に Várkonyi 先生の ID とパスワードを教えていただき、5日間ともその ID でログインしました。



（図3）9症例目の解剖前の集合写真

左から Glasz 先生、私、類家先生、中村先生、海外研修委員会の Mernyei 先生、Izsó さん

#### ■待機場所など

毎朝の集合する部屋はパソコンがたくさん置いてある組織学実習室のような部屋でした（図4）。パソ



コンのキーボードを寄せて自分のパソコンを置くような形になります。SE タイプのコンセントプラグがあればパソコンの電源が接続可能です。Wi-Fi は大学のゲスト Wi-Fi に加えて、eduroam が使えました。私の所属大学は eduroam が使えたため、スムーズに使えました。

部屋の鍵は初日に秘書さんから渡されますので、代表者がそれを最終日まで管理することになります。パソコン等は解剖中は待機部屋に置いていましたが、パスポートなどの貴重品は解剖室に身に着けて持ち込んでいました。

着替えは待機部屋で行います。男女の参加者がいたので、交代で着替えました。

昼食は 5～10 分ほど歩いた食堂まで移動します。混んでいると提供まで少し時間がかかります。食事は炭水化物多め、量多めでした。外出の際は一度スクラブから私服に着替え、食事を終えて戻ってきたら再びスクラブに着替えます。往復と食事の時間、着替えを含めるとゆっくりする時間はあまりありませんでした。

解剖室の前室？にロッカーがあります。ロッカー自体の鍵はかかりませんが、部屋の鍵は夕方には施錠されるようでした。初日にマスクやガウンなど自分で持参したものはすべてロッカーにもっていきました。



(図 4) 待機部屋にて、月曜日午前のレクチャー中の様子。

#### ■担当して下さった先生方、テクニシャンについて

- ・ Kiss 教授：男性。今回のコースディレクター。時間があれば待機部屋を覗いて様子を伺ってください。困っていることはない？などお気遣いをたくさんいただきました。
- ・ Várkonyi 先生：男性。私たちと年齢が比較的近かった(と勝手に思っています)ので、ディスカッションが非常にしやすかったです。初日で不慣れなこともあり、剖出や切り出しに戸惑いましたが、実際に見せて示して下さることも多かったです。初日に居残りしていた私達をベトナム料理屋さんに連れて行ってくださり、解剖のことだけではなくハンガリーのことなどたくさんお話していただきました。
- ・ Kenessey 先生：男性。私たちが引き続き不慣れなこともあり、解剖後にホワイトボードを使って所見



のまとめをしてくださいました。少し強面です声も大きめですが、ゆっくり分かりやすく話してくださいます。

・Kramer 先生：女性。器具の使い方が非常に厳密で、効率的な切り出し方をたくさん教えてくださいました。力を入れて頑張っって切り出しするのではなく、以下に自然に楽に切り出すか、というコツをたくさん教えていただきました。解剖後は解剖室でまとめのディスカッションをした後、待機部屋に戻ってきて先生がホワイトボードに書き出してくださるスタイルでした。

・Székács 先生：女性。以前、日本に留学されていたご経験があるため日本語が話せます、普通にペラペラです。解剖時は基本的には英語でやりとりをしました私たちがわからないときのみ日本語で教えてくださいました。この日は早めに報告書が送れたので、修正案を送り返してくださいました。解剖後などにはハンガリーでの子育てなど病理解剖以外の話を日本語で話してくださいました。

・Glasz 先生：男性。担当症例の臨床事項がとても長く、週の中頃に事前に送ってくださいました。先生のお部屋が待機部屋のお隣だったこともあり、先生の即興ピアノ演奏（前室にアップライトピアノがありました！）に招待いただき素敵な時間を過ごしました。

・Izsó さん：男性。ハンガリー語のみを話されるということですが、おそらくある程度の英語も理解しておられるような印象でした。小さな手で四苦八苦している私を優しく見守ってくださいました。

## ■注意事項

- ・ホワイトボードに使うマジック：汚れているため、きれいな手で使うと Izsó さんに注意されます。
- ・メス：頭部の皮膚切開と帽状腱膜上で剥離するときのみ使っていました。日本のメスとは違い、付け替え刃ではなく持ち手と一体型。ナイフと合わせて研いで使っていました。
- ・脳刀：日本の一般的なものと異なり、両刃です。気をつけてください。それ以外の臓器を切るときは、脳刀を使用してはいけないこととなっていますが、先生によっては普通に脳刀を使っている人もいます。
- ・はさみ：大きさは様々あり臓器によって細かく使い分けているような印象でした。日本の眼科剪刀は冠動脈剪刀と言われており、冠動脈や胆管、尿管、腎盂粘膜を切り開くのに使いました。
- ・ピンセット：特に胆管や冠動脈を開けるときには使用していましたが、使わない先生も多かった印象です。鉤付きと鉤なしの両方がありました。

## ■持ち物

- ・カメラ：参加者の誰かが少なくとも 1 台持って行ってください。首にかけられる紐がついていると良いかと思います。
- ・内履きの靴：シューズカバーは日本のものより薄くて頼りないです。捨ててもいい靴を 1 足持って行きましょう。
- ・アイシールド：何か持っていきましょう。使いまわせることが多いと思いますので、ひとまず 1 個あると安心かと思います。
- ・スクラブ：現地でも貸していただけますが、偏りがありそうです。特に男性用は白くてインナーが透けます。女性用は青色でやや厚めの生地でした。基本的に毎日交換・補充されているようでした。
- ・N95 マスク、サージカルキャップ、ガウン、手袋など：私のような心配な人は持っていきましょう。

ただ9回分となるとそこそこな量になるので荷物全体の量との相談がいるかと思います。手袋は解剖室にもあったのでそれを使っても良いのでは？と思いました。

・貴重品入れ：剖検中も貴重品は身につけましょう。ネックレスタイプやウエストポーチタイプを私たちは着けていました。

#### ■ホテル (AKEAH Verdi Budapest)

・City hotel という印象でした。立地がとても良く、ホテル内も清潔でした。最寄りの駅は道挟んで向かいにありますし、大学は徒歩5分以内に着きます。

・フロントの方は英語で会話できますが、クリーナーさんはハンガリー語で押し切られました。

・私の場合、事前に日本で精算していることがチェックイン時もチェックアウト時もフロントの方に伝わっていませんでした。領収書はスマホの画面か紙で提示できるように準備しておいてください。

Budapest Pass の受け渡しについても同様でしたので、秘書さんとのやりとりのメールを提示しました。

・タオルの交換や掃除については海外のホテルなので時折不十分なことがありましたが、フロントに電話するとそこそこ迅速に対応してくれることが多かったです。

・私の部屋は遮光カーテンがついていましたが、閉め切ると部屋がやや暗く、ベッドボードの小さい照明の角度を調整して部屋の調光をしていました。

・ホテルの Wi-Fi は、普通に使う分にはスピードは問題ありませんでした。

・ハンガリーは水道水が飲めるようですが、私は怖くて飲めませんでした。部屋にはケトルがあったので、それで沸かして飲んでいる参加者もいました。

・クリーニングサービスはなさそうでした。

・シャワーブースにはシャンプーとシャワージェルのみありましたので、必要なものは日本から持ってきたほうが良いかと思います。

・日本のホテル同様、小さな冷蔵庫が部屋に備えてありました。飲み物を冷やしたり、フルーツやチーズを入れておけます。

・朝食はバイキング。料理の種類は多くないが無難な味付け。スイカは日本のものと同じような味でした。日によっては団体客で非常に混み合うので、食事を選ぶ前に席の確保をするのがベターかと思います。

#### ■ホテル周辺

・SPAR というお店がホテルの中庭的なところを抜けたところにありました。大きめのコンビニ小さめのスーパー的な感じでした。お土産を選ぶには品数が少ないですが、ペットボトルの水や食事はあります。ペットボトルの水はホテルのフロントは割高なので急ぎでなければ外で調達した方が良いと思います。

・ハンバーガー屋さんやパン屋さんが近くに何軒かありました。少し歩くとベトナム料理屋さんも何軒かあるようです。

・徒歩約15分でショッピングモール (Corvin Plaza)に行けます。良心的な価格の服屋さん (ZARA とか H&M みたいなイメージ)が複数あり、日本人も普通に着れるサイズ展開でした。地下には小さめのスー

パーもありました。

#### ■観光、交通事情、その他

- ・Budapest Pass でメトロ、路面電車、バスが乗り放題でした。Google マップが乗り換え含めて道案内してくれたので、スムーズに移動できました。バスによっては車内温度が高めです。
- ・空港と市内を結ぶバスは別料金です。大きい荷物があるとタクシーの方が良さそうでした。
- ・空港と市内を結ぶタクシーは、帰りはホテルのフロントで手配してもらいました。空港と市内は場所によりますが、片道 30 ユーロか 9000 フォリント。カードでも支払えそうな雰囲気でしたが、私は現金で支払いました。
- ・日傘を使っている人は見かけませんでした。日焼け対策として帽子とサングラスがあると良いかと思っています。
- ・ハンガリーの治安自体は良いように感じました。女性 1 人で夜間歩いてもあまり怖くはありませんでしたが、海外なので貴重品の管理は気をつけていました。
- ・チップ文化がないようで、ほとんど現金は使いませんでした。しかし、中央市場では少額の買い物やお店によっては現金のみでしたので、少し手持ちがあった方が安心かとは思っています。

#### ■個人的に持っていく方が良さそうなもの

- ・洗濯バッグ：ホテルの洗面ボウルは水が溜められない仕様＋浅いです。現地で洗濯することが想定される場合は洗剤に加えて持って行ったほうが良いかと思っています。
- ・アルファ化米やフリーズドライの味噌汁：ハンガリー料理は美味しかったのですが、週の途中で疲れ果てて日本食が恋しくなり、持って行ったアルファ化米とお味噌汁で晩御飯を済ませました。個人的には少しでも持っていくのをお勧めします。

#### ■最後に

末筆になりましたが、このような貴重な研修に参加する機会をいただきまして、本当にありがとうございました。日本病理学会及び海外研修委員会の諸先生方、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。また快く研修への参加を後押しいただきました教授の梅北先生はじめ鳥取大学医学部病理学講座および附属病院の先生方、スタッフの皆様にも深く御礼申し上げます。研修中は Semmelweis 大学の先生方、スタッフの皆様にも多大なるご支援をいただき、心より感謝申し上げます。参加期間中、不自由なく快適に研修に集中できたのは、ひとえにご尽力いただきました皆様のおかげです。また、共に研修に参加者した中村先生、類家先生、そして吉田先生にも本当にお世話になりました、ありがとうございました。最後に、11 日間の研修に快く送り出してくれた夫と 2 歳の双子の娘たち、そして遠方から駆けつけて支えてくれた夫の母にも深く感謝の意を表します。